

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国英語教育研究団体連合会

（代表者 中村 勝徳 会員数 約60,000人）

T E L 03-3267-8583

1 前 文

今年で5年目となる共通テストは、2022年4月の高等学校の学習指導要領の改訂に伴う新課程テストであった。昨年までと同様に、過去のセンター試験で出題された発音やアクセント、語順整序等を単独で問う問題はなく、様々な資料や図表を通して英文を読み、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっている。情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成する、という学習指導要領における目標を反映した出題となっている。

今年の共通テスト追・再試験「英語（リーディング）」では、2022年に発表された試作問題を反映した出題がなされた。「立場の異なる5人の意見を読んで、論拠を整理する」ことを求める試作問題第A問を反映した問題が第8問で、「読み手に分かりやすいように情報を整理し、文章の論理構成や展開等について考える」ことを求める試作問題第B問を反映した問題が第4問で出題された。「5領域の力を総合的に育成する「英語コミュニケーションⅠ」「Ⅱ」と、発信力の強化をねらいとした「論理・表現Ⅰ」の内容に対応」という改訂のねらいが十分に達成されたかについては後述するが、試作問題と大きく変わらない出題であったことは受験者にとっては取り組みやすかったと思われる。

昨年と比較し、大問数が6から8へ変化した。A、B問題などの分割がなくなり、設問数は39から33、解答数は49から44へ減少した。それでも、様々なテーマや形式の設問に対応するためには、受験者にとってはかなりの速読力が求められ、最後まで解き終えることができなかった受験者がいたことが予想される。一律な英文の読み方をするのではなく、素材となる英文の種類や示される図や資料等を理解し、目的に応じて様々な読み方をするのが要求され、設問の趣旨に合った読み方をしなければ時間が不足する。速読と精読のバランスの観点、特に思考力を測定する観点からすると、今後も語数を増やすことについては慎重になるべきである。情報量が増え、問題も複雑になり、短い時間の中で単に注意力や情報処理能力を測定するような試験に陥るのではなく、じっくりと考える時間を設定して思考力を十分に測るような試験問題であることが求められるのではないかと考える。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

令和7年度の共通テスト追・再試験「英語（リーディング）」は以下のような構成であった。

大問	内容	配点	設問数	解答数
第1問	50周年を迎える地元の文房具店の広告チラシ	6	3	3
第2問	夫婦間での家事の共有についての記事	12	4	4
第3問	ある少女の夢についての物語文	9	3	6
第4問	学校の宿題の在り方についてのエッセイ	12	4	4
第5問	地域のイベント運営についてのメモ作成	16	5	6

大問	内容	配点	設問数	解答数
第6問	ある少年が祖父母の家を訪れる物語文	12	4	8
第7問	硬水と軟水についてのプレゼンテーション	16	5	6
第8問	動物園についての複数意見をまとめてエッセイ作成	17	5	7

第1問 資料に示された事項についての情報の読み取りとその内容の読み取りに関する設問である。設問数は3問、配点は6点であった。実際のコミュニケーションで出会う様々な形式の情報を読み取り、その情報を基に必要な情報を把握する力が求められる問題である。本問の資料は、地元で開店50周年を迎える文房具店が特別なプレゼントを人数限定で配布したり、その月のおすすめ品等を示したりしている広告チラシである。

問1 資料の2段目にある“Discounts available for purchases over \$60”の部分を読み取れば容易に解答できる。選択肢も紛らわしいものはなく解答しやすいものであった。受験者にとっても取り組みやすい問題で、最初の問題はこういったレベルから始まることが望ましい。

問2 その月のおすすめ商品に共通する要素を問う問題であった。これについても各商品の特徴を効率良くつかむことができれば、色やカバーを変えられるなど様々な選択ができることが分かる。

問3 フライヤーを持っていけば特別なプレゼントをもらえるはずであるのにもらえなかった理由を問う問題である。該当箇所を読めば30人限定であることが分かるので、正答②を選択できる。非連続的な文章の読み取りをバランス良く問う問題であり、第1問の難易度としても適切で良問であった。

第2問 資料に示された事項についての概要や要点の読み取りに関する設問である。設問数は4問、配点は12点であった。「意見」の内容が問われるなど、複数の情報を客観的に判断する思考力・判断力が求められる出題となっている。“Who does what at home?”というタイトルのオンライン記事であり、夫婦間の家事の共有について書かれている文である。テーマが同時代的なものであり興味深い。こういった社会的事象について考えさせるテーマは好ましい。授業の現場においても、こういった問題について読んだり、聞いたり、話したり、書いたりする機会が多く創出されることにつながっていくと考えられる。

問1 記事を書いたStephenの「意見」を答えさせる問題である。“His food has become really good”という部分から正答④と合致することが分かる。

問2 第2段落で示されている内容及び数値を正確につかむことで正答を導くことができる。紛らわしい選択肢もなく、取り組みやすかったと思われる。

問3 調査結果から分かることを答えさせる問題であったが、4つの選択肢から“husband”についての内容を答えれば良いことが明白であるため、第2段落後半、“The survey asked the couples about how …”以降を正しく理解できれば正答を導くことができる。英文テーマも良く設問も明瞭で良問であった。

第3問 物語文の内容について、登場人物の行動や心情を把握し、事象を時系列的にまとめることが問われている。昨年はA、Bに分かれていたが、今年は昨年のBの問題形式に類似したもので設問数は3問、配点は9点であった。イギリスの高等学校で勉強している生徒が興味深い物語を見付け、それを授業で発表することを求められている。一点気になったことは、設問のリード文が本試験と異なっている点である。本試験には文章にタイトルがあり、追・再試験にはタイトルがない等多少の差異はあるが、設問の方向性も大きな違いは見られない。追・再試験の表現よりも本試験の表現の方が分かりやすいと思われ、特段の理由がなければ、均質性・公平性の点からも同じ表現であって良いと思われる。

- 問1 物語の主人公の特徴を答えさせる問題である。ロボット制作で高い評価を受けたということが読み取れば正答することができる。
- 問2 事象を時系列で並べさせるというこれまでも第3問にあった形式ではあるが、偽肢が1つ含まれているという点では昨年の第5問の問1の形式である。事象についての正確な時系列の把握はとても重要なことであり、偽肢が1つあることは差し支えないと思われる。今後もこの形式で良いと考えられる。
- 問3 主人公 Sora の心情を推測させる問題であった。推測とは言っても本文最終文の“Sora sadly said to herself”の部分を読み取ることができれば正答を導ける問題であり、出題にも無理がなく受験者にも取り組みやすい問題であった。文章中に明示的に示されていなくても、物語文の理解には登場人物の心情把握が重要であることから、このように類推を求めるような問題は良問であると言える。今後もこの種の出題にも期待したい。
- 第4問 2022年に示された「試作問題の第B問」に類似した形式であり、学校の宿題の在り方についてのエッセイを推敲していく過程で、先生のコメントを参考にしながら論理的な文章を完成させる問題である。第4問は言わば「読むこと」と「書くこと」の統合をねらいとした問題であり、今後の共通テストの作成方針を象徴する設問であった。
- 問1 先生の助言に基づき、文章の適切なタイトルを選ばせる問題であった。もちろん問題の場面設定としては「文章を推敲していく過程」ではあるので、そこで問われることは「書くこと」の力を問うていると言えなくもないが、実質的には読解力を問うていると見ることもできる。問1のような問題は標準的な読解問題でもよく見られるものである。技能を統合させて英語の力を測ろうとする方向性には大いに賛成するが、この種の設問でそれが実現できているとはいえない。斬新な設問形式を開発し、新しい英語教育の方向性を反映させようとしているご苦労は大変なものであると拝察するが、発信技能の育成にはどのような出題が有効かを改めて考えていただきたい。
- 問2 前文とのつながりを良くするために、文章の冒頭に付け加えるべき文を選択させる問題であった。問題としては素直で取り組みやすい問題であったが、前述のように従来の読解問題の域を大きく超えてはいない問題であった。
- 問3 あいまいな表現をより分かりやすく明示的に書く内容を選ばせる問題であった。選択肢に紛らわしさがなかったので取り組みやすかったと思われる。
- 問4 試作問題と同じ形式を踏襲しているものの、本試験と求めることは異なっていた。本試験では「書き換え」を求めているが、追・再試験では「書き加え」を求めている。作問のフレームは同一であったが、本試験とはやや求めるものが異なっている印象がある。上でも述べたように、特段の理由がなければ、均質性・公平性の点については留意されたい。
- 第5問 記事やそれに関連するグラフを読み取り、必要な情報を整理したり、まとめたりすることを求めている問題である。地域のイベントを運営するにあたり、資料を活用しながらメモを作成することが求められている。本問は本試験の当該部分と大きく異なっており、昨年の共通テスト第4問、資料文を基にハンドアウト（本問はメモ）を作成するという形式に近いものである。本試験のようにイラスト問題もなかった。問題作成の方針が改まっているので、追・再試験も本試験と同じ方向性を持つべきであると考えられる。そういった意味では、例年よりも本試験と追・再試験の差異が大きい印象がある。
- 問1 本文のメインテーマとなっている“SLA Festival Model”の目的を問う問題である。本文の第1段落が正確に読解できれば正答を導くことができる。
- 問2 “SLA Festival Model”の“Scheme”についての内容理解を求める問題である。これも該

当箇所を読解できれば取り組みやすかったはずである。

問3 グラフの読み取りを求めている問題で、合致しないものを除去させる形式であった。グラフの読み取りは思考力を問う問題として重要であり、本問は選択肢も明瞭で良問であった。

問4 資料の後半部分の理解を問う問題であった。来場者のコメントの中から新しい提案をしているものを選び取る形式で、思考力を求める問題であり問3と同様に好ましい出題である。

問5 本文、そして資料後半から読み取らせる問題である。複数の資料から必要な情報を見付け出す力は重要であるので、今後もこういった力を求める問題が出題されることが望ましい。

第6問 物語文を読み、その内容を正確に理解するとともに、事象を時系列で把握したり、その物語文についてのワークシートを完成させたりする問題である。イラスト問題を含んでおり、設問数は4、配点は12点であった。この問題についても、本試験とは異なる形式や、問題の方向性が見られることを付け加えておく。

問1 物語文のある場面をイラストで答えさせる問題である。第4段落の“I retreated away from the left armrest and shifted my body toward the window.”の部分でほぼ正答は一義的に決まるので設問に瑕疵はないが、“As she sat down, she spread her arms and legs into the space I had occupied before.”という部分が、心温まる物語の善良な登場人物が取る行動と余り結び付かないものであった。

問2 事象の時系列の理解を問う問題。問題の形式に問題はなく、③が偽肢であることは明白ではあるが、④の“She shows interest in something else to make things less awkward.”という英文がやや分かりにくかった受験者は少なくないと思われる。第7段落の“… then she took out her phone and started tapping on it”の部分との対応を考えさせる問題であると思われるが、④の内容と必ずしも結び付かなかった受験者もいたのではないだろうか。もう少し明瞭な選択肢でも良かったと思われる。

問3 登場人物の特性を問う問題であり、問4を含めて、本文の正確な読解ができれば正答を得ることのできる問題であった。選択肢にも紛らわしいものはなかった。

第7問 まとまりのある文章を読み、必要な情報を整理しながら、プレゼンテーションを完成させる問題である。昨年の第6問と同様の形式であった。「硬水と軟水」がテーマであり、情報を効率良く的確につかむことが必要であることから、段落の概要をまとめながら読んでいくことが求められている。設問数は5問、配点は16点であった。

問1 プレゼンテーションのタイトルの副題を選択させる問題であった。各段落のキーセンテンスをつかむことができれば正答にたどり着くはずである。こういった各段落の概要の理解を求め、英文の全体理解を問う問題は良問である。

問2 本文の内容を反映する表に適切なものを入れさせる問題。第2段落の内容を押さえていれば正答できる問題であり、明瞭な設問であるので取り組みやすかったと思われる。このように得た情報を表と関連付けるような問題はとても好ましいものである。

問3～5は本文の正確な読解が求められる問題であった。選択肢も問3、問4は4個、問5は5個あり、選択肢の英文も一定の分量があり、「硬水と軟水」という身近なテーマではないことから、読解にはある程度の時間を要したことは考えられる。

第8問 あるテーマに対して、複数の意見や資料について正確に把握し、エッセイを完成させる問題である。「動物園」に関する5人の意見を読んで、自分のエッセイを完成させる形式である。本問は、試作問題の問題Aで示された3段階のステップを踏みながらエッセイを完成させる形式であった。本文の長さも800語を超えており、5人の異なる立場を正確に把握しながら、求められている条件で設問に対応していくことは、受験者にとっても最終問としては時間との戦いがあった

ように思われる。

問1, 2 5人の異なる意見を正確に把握することを求められている。誰の意見を把握するかは設問で明確にされているので、得るべき情報は見付けやすく、取り組みやすい問題であったと思われる。ただし、本文の量が多いため一定の時間を要する問題ではあるだろう。

問3 5人の中から与えられた自分の立場に賛同する人を2人選び、さらにその内容を問う問題である。5人の意見を要点をまとめながら効率良く情報をまとめていく必要があり、共通テストらしい作問となっている。

問4 アウトラインを作成することに加え、さらに2つの資料からエッセイを完成させる形式となっている。資料の1つには表も含まれており、自らの意見を理由付けするための情報を読み取ることが求められている。情報の整理には時間を要したと思われるが、選択肢の紛らわしさはなく、受験者の力を測る良問であったと言える。

3 総評・まとめ

本稿では2025年度（令和7年度）共通テスト「英語（リーディング）」（追・再試験）について検討してきた。大学入試センター発表の問題作成方針にも示されているように、「深い理解を伴った知識の質を問う問題や、知識・技能を活用し思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する」という方針での問題作成には、大変なご苦労と創意工夫が必要とされると拝察する。様々な資料や図表を通して英文を読み、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっており、また、外国語に関する様々な知識を実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付ける、という学習指導要領における目標を反映した出題となっている。受験者が身に付けた力を十分に発揮できる良問も多い。さらに、今年度は新しい学習指導要領のねらいを反映した問題形式が出題されるなど、改善への高い意識を感じさせるものであった。しかし一方で、技能統合的な理解を求める問題や、発信技能をより育成するための問題においては、その試みが十分に目的を達せられたかにはまだ議論の余地がある。また、設問数が減少し、本試験では平均点も上昇したことから受験者にとっては取り組みやすいものとなったが、大問数は8個に増え、求められる力の幅が広がり時間内に解答することに苦労した受験者も少なくなかったと思われる。今年は選択肢の紛らわしさや、単に作業量が増えることによって生じる負荷は少なかったが、今後も受験者がその力を最大限に発揮できるような作問をお願いしたい。さらに、分析部分でも何度か言及したが、今年は例年に比して、本試験と追・再試験の形式の相違が見られた印象がある。特段の理由がなければ、均質性・公平性の点からも余り大きな相違は望ましくないため、その点をご留意いただきたい。扱われる英文については、その題材や形式については幅広いものとなるように今後も検討をお願いしたい。そうしたことによって、教員の実際の指導や生徒の学びもより豊かなものになっていくと考えられる。

4 今後の共通テストへの要望

報告書（本試験）の方に記載。